



珍本

後編

拾九

^ 13
3318
39



門へ13
3318
39



珍味 五水 集括 活活 扇格 五



目録

大正十八年
本大學出版部
贈

一 蝦毛エビの程ほどと 粗あらを 活あ 珍味ちんみ

は ち ぬ ち ぬ ち ぬ

一 稀まれ 同解どうげ 同集どうしゅう 同活どうかつ 同扇格どうせんかく 珍味ちんみ

切きり ち ぬ

珍事より水邊に流るる舟の

浪毛の程に概を以て

珍事より水邊に流るる舟

舟をさるるの舟人の船を帆

舟は波が木の葉の如く書

空くもあふも二竹目

くまのひと本母の切腹をいひ
り別をきりてをばけりまのちま
るのどろり車の上へ乗る
そこのはけりてりてりてり
の何中をいひまのりの子の
月のはるまの命のりは
流るるまのりてりてり

のまのりてりてりてり
流るるまのりてりてり
一和二十ハ最
まのりてりてりてり
まのりてりてりてり
海島まのりてりてり
流るるまのりてりてり

あまをながむらんあまの原へ
法華陀書家も半
しとて今より牛馬の如し
五事しとて一心の如し
昔は後人時のこと今も
そとて花鳥川の園あり
そとて花鳥川の園あり
まがれ書をも読むらん
一室して心を定む
風の如くして雲の如く
空の如くして月の如く
るが如くして心の如く
きし世はいつや打ち消さる
のささし心の如く



半にそむき付もして傷を

の影はあつらひ中きくらから

市陰こゝろ年一志きく口と事根

のちもし事一もふ米のそ根根

りくの子目取の年取らさき

者あゆみさ消用とて本

せどお守りふことおのりもえ

あふんはさききく一愛国とる

あふ二代目も水が母の根根法

華屋書家の印やさきに似

そ根がうもほろ多まどくも書あ

期の子あふふくく一解と根

き今日の仕度ならく一と根あ

佛果の母さたさくふ何と

陽田川の底はあつと云ふが
 元来一筋の底ありて砂は
 一東海邊と云ふが
 因縁は長江の中長砂の
 者なり
 湯谷尾洋水より
 大少の事
 諸が
 因が
 是れ
 金一白煙の

陽田川の底はあつと云ふが
 元来一筋の底ありて砂は
 一東海邊と云ふが
 因縁は長江の中長砂の
 者なり
 湯谷尾洋水より
 大少の事
 諸が
 因が
 是れ
 金一白煙の

